

## 嵐山と松尾芭蕉——大悲閣にある松尾芭蕉の句碑を基にして——

玉水洋匡

はじめに

『続・京都史跡事典』によると、  
京都市の西の端、京都府京都市西京区嵐山中尾下町に大悲閣はある。正式には嵐山大悲閣千光寺といい、黄檗宗の寺院である。

初め天台宗、文化五年以降黄檗宗、本尊は恵心僧都作と伝える千手観音である。

千光寺はもと清涼寺の西方中院（右京区嵯峨釈迦堂門前南中院町）にあって、後嵯峨天皇の祈願所であったが長らく衰退していた。

慶長十一年（一六〇六）に保津川開削に成功した嵯峨の土倉業、角倉了以が同十九年に現在地へ移し、大悲閣を建立し、二尊院の道空了椿を請じて中興の開山とした。<sup>(注1)</sup>

とある。また「了以自身も大悲閣に住み開削した諸川の通舟の便益を念じたといわれる」という。<sup>(注2)</sup>

渡月橋を渡り、保津川沿いの道を歩くと、大悲閣の入り口が現われる。この大悲閣の入り口に松尾芭蕉の句碑が建っている。表面には「花の山 二町のぼれは 大悲閣」という句と「はせを」の名が刻まれている。裏面には明治十一年（一八七八）に句碑が建立された経緯や建立者の氏名などが刻まれている。

句碑に刻まれた「花の山 二町のぼれは 大悲閣」は芭蕉研究者たちによれば「存疑句」とされている。<sup>(注3)</sup>「存疑句」とは穎原退蔵が初めて用いた用語で、「諸書に芭蕉の作として傳へられて居るが、なほ十分確實とし難い」句のことである。<sup>(注4)</sup>この句に対する先行研究としては平成六年（一九九四）の竹内千代子による「芭蕉の存疑句」が挙げられる。<sup>(注5)</sup>この論文は井上重厚が天明七年（一七八七）に著した『もとの水』掲載の「芭蕉の存疑句」について考察したものである。「花の山」の句についても、詠まれたとされる年代、詠まれた季節、その時期の芭蕉の行動から、実作である可能性を指摘している。<sup>(注6)</sup>

本稿ではこうした先行研究を踏まえ、芭蕉句碑を足掛かりとして、「花の山」の句を伝承文学的に考察していくことが目的である。芭蕉句碑は単に、刻まれた芭蕉の句と建立者、建立年が明らかになるだけの遺物ではない。なぜこの場所に句碑が建てられたのか。なぜこの句が選ばれたのか。なぜ現在までこの句碑が受け継がれてきたのか。そこには芭蕉句碑に関わる人々の想い

が込められていると考えている。「花の山」の句の伝承とそれに伴う句碑の存在を分析することで、伝承文学研究の一領域として、「花の山」の句が生まれ、当該地域に定着し、芭蕉句碑を建立することで「花の山」の句にまつわる伝承が権威づけられていった筋道を明らかにしていきたい。

### 一 江戸期における「花の山」の句

江戸時代において、「花の山」の句は俳書にたびたび取り上げられている。はじめに「花の山」の句が掲載されたのは、天明七年（一七八七）に井上重厚によってまとめられた『もとの水』である。『もとの水』の内題には「芭蕉翁發句集」とあり、「嵐やま」という前書に続けて「花の山二町のほれは 大悲閣」と書かれている。<sup>(注1)</sup>井上重厚は『俳諧人名辞典』によると、「去来の外戚に当るといふ。京都の人。蝶夢の門人で、初め柳巢と号した。明和七年一七七〇に洛西嵯峨弘源寺跡に落柿舎を再興して住み、落柿舎重厚と称し」たといふ。<sup>(注2)</sup>師匠の蝶夢は「京都の人。（中略）宝暦六年一七五六に帰白院十一世の住職になり、その頃すでに蕉風復興の意あり、蕉門の俳書を研究し知名俳人との交わりが広がった」といふ。<sup>(注3)</sup>このように蝶夢は芭蕉研究に情熱をそそいだ人物であり、弟子である重厚もその遺志を受け継いでいたのである。その後寛政十一年（一七九九）に虬戸庵素綾によってまとめられた『風羅袖日記』では、「元禄四未 春の部」に収められ、「あらし山にて」の前書と「華の山 二町のほれは 大悲閣」と書かれている。<sup>(注4)</sup>続いて文政十年（一八二七）に古学庵仏号らによってまとめられた『俳諧一葉集』では、「春の部」に収められ、「嵐山」の前書と「花の山二丁のほれは 大悲閣」と書かれている。<sup>(注5)</sup>そして文政十三年（一八三〇）に月院社何丸によってまとめられた『芭蕉翁句解参考』では「春」の巻に収められ、「あらし山にて」の前書と「花の山二丁のほれは 大悲閣」と書かれている。<sup>(注6)</sup>さらに句の後には次のような考察が加えられている。

愚考嵐山の櫻にて亀山帝の御時吉野よりうつし植玉へる名花なり此句の意にて山にて尋常の山なれとも名花の種をうつし植たる故に花の山として花を題に取て作りたるなりよしの山にて山か名山なれはいかなる櫻を植ても土目の上品威か故皆名花になる事なり爰に於て吉野の句にて山櫻と山を重に作りたるなり猶この大悲閣を結び入たる譯にて前の櫻の句の解にてらし合せて其對句の妙くの意味をしるへし。<sup>(注7)</sup>

何丸は「花」に対して主に考察を行なっていて、大悲閣についてはほとんど触れていない。以上のように江戸時代において、「花

の山」の句が芭蕉作と考えられていたことは分かる。しかし初めて出てくるのは、芭蕉が亡くなってから約百年後である。また俳書の記述だけでは、なぜ「花の山」の句に大悲閣が取り上げられているのか、判然としない。

江戸時代においては、俳書だけではなく、多くの随筆が編まれた。随筆の中には名所に関する記述や俳諧の掲載がたびたび行なわれている。そこで大悲閣に関して記述している随筆の中に、「花の山」の句が掲載されているかを調べた。結論としては管見の限り、記述は見られなかった。山口敬太らは「近世の紀行文にみる嵯峨野における風景の重層性に関する研究」において、江戸時代の紀行文・見聞録のなかから京都について書かれた部分を抄録した『史料京都見聞記』一～三巻のうち、嵯峨野に関する風景記述がみられた二十二編の紀行文を資料として考察している<sup>(注14)</sup>。そのうち大悲閣は一編だけとしている<sup>(注15)</sup>。実際に確かめてみると、『史料京都見聞記』一～三巻全五十五編のうち、嵯峨野に関する記述は二十四編あった<sup>(注16)</sup>。そのうち大悲閣に関する記述は三編見つかった<sup>(注17)</sup>。まず延宝七年（一六七九）以降に黒川道祐によってまとめられた、『近畿歴覧記』では延宝八年（一六八〇）九月の条に「嵯峨行程」が書かれており、ここに大悲閣の記述がある<sup>(注18)</sup>。ここでは大悲閣を建立したのは、角倉了以ではなく息子の素庵ということになっている。また角倉了以に関する石碑についても述べられているが、「花の山」の句や芭蕉については触れられていない<sup>(注19)</sup>。次に寛政五年（一七九三）に津村涼庵によってまとめられた『思出草』である。『思出草』には「大悲閣とて角倉了意かたてける寺あり。つき鐘かけたるうへの岡に羅山道春のかける石ふみあり、了意かありし世のいさほしこまやかにしるしつたり」と書かれている<sup>(注20)</sup>。大悲閣を建立したのは角倉了以であること、角倉了以に関する石碑があることは書かれているが、やはり「花の山」の句や芭蕉については触れられていない。最後に嘉永三年（一八五〇）に西澤一鳳軒によってまとめられた『綺語文章』である。『綺語文章』には「大悲閣には恵心の作の千手観音を安置し、傍に角倉了以の像、七十有余の相、法体衣を著し、手に石割斧を持、片膝を立て円座の上に坐す。碑石は林道春の撰にて左り側に有り、寛永六年冬と誌す、二百二十余年の昔也」と書かれている<sup>(注21)</sup>。大悲閣の建立者についての記述はないが、角倉了以の像のこと、角倉了以に関する石碑についての記述はある。一方でやはり「花の山」の句や芭蕉については触れられていない。随筆ではないが、安永九年（一七八〇）に秋里籬島によってまとめられた『都名所図会』巻之四「右白虎」にも大悲閣の記述はある。そこには「あらし山の麓に道ありて渡月橋より七町ばかり西なり 本尊観音の立像にして恵心の作なり 角倉了意が碑あり」と書かれている<sup>(注22)</sup>。やはり本尊や角倉了以に関する石碑の記述だけで、「花の山」の句や芭蕉については触れられていない。

つまり管見の限りではあるが、江戸時代において「花の山」の句に関する記述は俳書だけに留まっており、それ以外に記録している書物はないのである。この状況が大きく変わるのは明治時代に入ってからのことである。

## 二 「花の山」の句碑建立と「洛西嵐山大悲閣眺望之圖」の作成

江戸時代では俳書だけに見られた「花の山」の句であるが、前述した通り大悲閣の入り口には明治十一年（一八七八）に建立された句碑がある。裏面には句碑が建立された経緯や建立者の氏名などが刻まれている。碑文は次の通りである。

此芭蕉翁句直下花字澹乎若無意起雅切即十

五字皆靈活洵爲絶唱凡諸名勝有翁句則刻石以

傳此勝無之爲憾乃大悲閣主角倉關岳興俳諧者流村上碩

水杳藤雨村岡如山小山泰山相共謀之四方同志者得若干

資都下人某々亦頗有助以建之且爲下登之閣之道標

明治十一年 三月 信天翁山中獻諡

この碑文に『嵯峨誌』を参考に訓点と句読点を施してみると、次のようになる。

此芭蕉翁句、直下「花字」澹乎。若無<sub>レ</sub>意、起<sub>レ</sub>雅切、即十

五字皆靈活、洵爲「絶唱」。凡諸名勝、有「翁句」則刻<sub>レ</sub>石以

傳。此勝無<sub>レ</sub>之爲<sub>レ</sub>憾。乃大悲閣主角倉關岳、興「俳諧者流・村上碩

水・杳藤雨村岡如山・小山泰山」、相共謀<sub>二</sub>之四方同志者<sub>一</sub>、得<sub>二</sub>若干

資<sub>一</sub>、都下人某々亦頗有<sub>レ</sub>助、以建<sub>レ</sub>之。且爲<sub>下</sub>登<sub>二</sub>之閣<sub>一</sub>之道標<sub>上</sub>。

明治十一年 三月 信天翁山中獻諡<sub>(金三)</sub>

碑文を解釈してみると、次のようになるだろう。

この芭蕉翁の句は、花の字のすぐ下は、あっさりとしている。意味が無いようであるが、興趣が立ち上がり切れ、つまり十五字すべてが活力を与え、本当に絶唱となっている。ほとんどの名勝で、翁の句があり石に刻むことで伝えている。この

名勝では碑が無く心残りであった。そこで大悲閣主の角倉關岳は、俳諧者である村上碩水や小山泰山とともに、周りの同志と計画し、少しの資金も得て、都の人々の協力も得て、この碑を建立した。また大悲閣に上る道標となる。

明治十一年 三月 信天翁山中獻諡

つまり前半は「花の山」の句のよさについて述べている。そして他の地域の名勝には、芭蕉の句が知られ句碑も存在しているのに、大悲閣にはないことを嘆いている。次に句碑の建立を計画したのは、当代の大悲閣の主であった角倉關岳だと分かる。『国史大辞典』によれば、角倉關岳は角倉了以から数えて八代目の大悲閣主であり、明治初年大悲閣を万福寺末寺としたのだという。<sup>(注26)</sup>また『続・京都史跡事典』によると、「寺は明治維新の際、大悲閣を除き、境内、山林、什宝等多くを失ったが、明治になって寺地を拡張し、漸次諸堂を整備した」という。<sup>(注25)</sup>これらを総合して考えると、明治維新により多くが失われた大悲閣の再建のため、角倉關岳はさまざまな対策を行っていたのであろう。大悲閣再興の一つが芭蕉句碑の建立だったと考えられる。句碑建立に協力してきた人物は村上碩水、小山泰山、信天翁山中獻について判明している。村上碩水は『鳥取大学附属図書館報』によると、「嘉永年間に活躍した鳥取出身の俳人である」という。<sup>(注26)</sup>そして「京に居を定めつつも、諸国を行脚して他国の俳人と交わり、ときに故郷である鳥取に帰る、そんな生活ぶりであったのだろう」と考察されている。<sup>(注27)</sup>小山泰山は「山城国葛野郡梅津村」に住んでいた人物で、明治二十二年（一八八九）には俳書『福祿寿』をまとめている。<sup>(注28)</sup>信天翁山中獻については次のようにある。

現在の愛知県碧南市出身の幕末維新期の文人である。信天翁は静逸と共に号で、諱は猷という。篠崎小竹、斎藤拙堂に師事し、京都へ上って勤王の志士と交わるなかで岩倉具視の知遇を得、維新後官吏として明治新政府の立上げに尽力し、明治六（一八七三）年に退隠した。

以後、京都の下鴨や嵐山の山荘「対嵐山房」で文人として悠々自適の生活を送り、明治一八（一八八五）年に死去した。<sup>(注29)</sup>

以上のように、句碑建立に関わった俳人たちは嵐山周辺につながりがあったのである。彼らの尽力によって、俳書に掲載されるだけであった「花の山」の句が伝えられるようになったのである。

そして句碑建立の十三年後、明治二十四年（一八九一）に「洛西嵐山大悲閣眺望之圖」が作られている。図の冒頭には「花の山」の句と「はせを」の名前が書かれている。また大悲閣の入り口には「はせを碑名」と句碑が描かれ、句碑には「花の山」の句が読めるように記されている。<sup>(注30)</sup>

ここまで見てきたように、明治期に入ると大きな契機として「花の山」の句碑建立が挙げられる。目に見える形で「花の山」の句が芭蕉の作だと意識されるようになったのだ。また絵図に描かれることによって、句碑建立のことがより広く伝わることになる。角倉關岳が意図した通り、人々に芭蕉の句が大悲閣にあることを伝えられるようになったのである。

### 三 明治期以降の俳書と句碑建立以後の大悲閣

「花の山」の句碑が建立されて以降、芭蕉の発句を集めた「芭蕉集」が相次いで編まれることになる。「花の山」の句は必ずと言っていいほど、「芭蕉集」に取り上げられている。始めの頃は「芭蕉実作句」として取り上げられていた。句碑建立後「花の山」の句を「芭蕉実作句」として取り上げている「芭蕉集」には次のようなものが挙げられる。

- ① 明治二十四年（一八九一） 花の本秀三・月の本素水校『纂註芭蕉翁一代集』今古堂
- ② 明治二十六年（一八九三） 白日庵守朴編『芭蕉翁発句集』西村寅二郎
- ③ 明治三十年（一八九七） 阿心庵雪人編『芭蕉全集』博文館
- ④ 明治三十六年（一九〇三） 大塚壽助著『芭蕉俳句全集』内外出版協会
- ⑤ 明治四十一年（一九〇八） 角田眞平著『芭蕉句集講義』春之巻 博文館
- ⑥ 大正十年（一九二一） 沼波瓊音編『芭蕉全集』岩波書店
- ⑦ 大正十四年（一九二四） 角田竹涼校訂『芭蕉翁発句集』竹冷文庫
- ⑧ 大正十五年（一九二六） 神田豊穂著『日本俳書大系』第一巻 日本俳書大系刊行会
- ⑨ 昭和三年（一九二八） 正宗敦夫編『芭蕉全集』前編 日本古典全集刊行会
- ⑩ 昭和三年（一九二八） 沼波瓊音編・贄川他石校訂『芭蕉全集』岩波書店
- ⑪ 昭和三年（一九二八） 神田豊穂著『普及版俳書大系』第一巻 春秋社<sup>(金沢)</sup>

以上のように、多くの「芭蕉集」に「花の山」の句は「芭蕉実作句」の「春の句」として取り上げられてきた。状況が変わり「存疑句」とされていくのは、主に昭和初期以降である。管見の限りでは、次のようなものが挙げられる。

- ① 大正十一年（一九二二） 荻原井泉水校訂『芭蕉俳句全録』聚英閣【補遺・考證不明】
- ② 大正十五年（一九二六） 桃李庵編『芭蕉翁一代集』文光堂書店【記載なし】
- ③ 昭和六年（一九三一） 勝峯晋風編『新編芭蕉一代集』春秋社【芭蕉俳句不審抄】
- ④ 昭和七年（一九三二） 頼原退蔵校註『芭蕉俳句集』岩波書店【考證】
- ⑤ 昭和七年（一九三二） 服部畊石著『芭蕉句集新講』下巻 四條書房【疑問の一】
- ⑥ 昭和二十二年（一九四七） 頼原退蔵編著『新校芭蕉俳句全集』全国書房【存疑句】
- ⑦ 昭和四十五年（一九七〇） 中村俊定校注『芭蕉俳句集』岩波書店【存疑句】
- ⑧ 平成七年（一九九五） 井本農一ら注解『松尾芭蕉集』一 小学館【存疑句<sup>(注15)</sup>】

初めに「花の山」の句を「存疑句」と判断したのは、荻原井泉水である。しかしながら荻原井泉水は「花の山」の句が「芭蕉実作句」と考えているような節もある。『芭蕉巡礼』の中に描かれた、昭和三年（一九二八）三月の大悲閣訪問では次のように書いている。

温泉旅館の手前の舟着場にと、碑が立っている。

花の山二丁のぼれば大悲閣 芭蕉

この句である。

「何だか名所案内のような句じゃありませんか」

「そう云えぬこともないが、まあ即興的に云ったものだろう、桜にうかれ騒いでいる、そこから僅か離れた所に静かな御堂がある。そういう気持を芭蕉は出したかったのだろう。それが感じられないこと(注15)もない」

以上のように、荻原井泉水自身は「花の山」の句を「芭蕉実作句」であることに對して、否定しているわけではない。それでもこれ以後「存疑句」として扱われていくのは、勝峯晋風による『もとの水』の捉え直しが大きい。井上重厚が編集した『もとの水』であるが、井上自身が各地を訪れる中で集めた「芭蕉」の句を載せたとされている。<sup>(注16)</sup>しかし『もとの水』以前の出典が存在しないものも多く、いつごろどこで詠まれたのか『もとの水』の中でも明らかにされていない。<sup>(注17)</sup>そのため『もとの水』を始めの出典とする句は「存疑句」とされてしまっているのだが、だからこそすべての句が「疑わしい」わけではない。特に「花の山」

の句は多くの人が大悲閣を訪れ、句碑を目撃している。そしてすべての人が「芭蕉実作句」であることに對して、否定しているわけではない。むしろ「芭蕉」が詠んだ句として自然と受け止めているようである。

例えば山口誓子は『句碑をたずねて』の句碑巡りの中で、大悲閣も訪れている。

嵯峨へは、日を改めて再び出掛けた。

渡月橋の小橋のところから通船で大悲閣へ行く。船でしばらく待っていると「お待ちとうはん」と云って若い船頭が船に乗って来た。

その日も水量は多かつたが、船頭は棹をさして川上へ遡って行った。小倉山が正面に見えるあたりで、船は岩にごつんとぶつかった。そこが大悲閣の下である。

山の登り口に

花の山二町登れば大悲閣

自然石の平らな面に彫られたこの句は里程標のような句碑だ。芭蕉の作とは信じ難い。明治十一年の建立。<sup>(註36)</sup>

山口誓子はやや否定的に見ていることが分かる。一方で司馬遼太郎は「街道をゆく」の取材の中で大悲閣も訪れている。

『嵯峨日記』によると、芭蕉はこの時期、大井川（大堰川・保津川）に舟をうかべ、千鳥ヶ淵のむこうの戸無瀬の淵までさかのぼっている。途中、陸に、陸にあがり、大悲閣の石段をのぼったことは『嵯峨日記』には出ていない。

ただ大悲閣へののぼり口にある芭蕉の句碑によってそれを知ることができる。

花の山二町のぼれば大悲閣

なにやら挨拶じみた句で、芭蕉の作品とするようには気の毒のような出来である。芭蕉もこの句を『嵯峨日記』には入れていないし、重んじもしなかつたようで、私の手もとの二種類の『芭蕉句集』にもこの句がない。おそらく地元で句会をひらいたとき、ひとびとの手帳にもこの句が記録されたのであろう。

「俳諧というのは、まずあいさつである。その座にきて、前栽でも何でも何でも目についたためずらいものやことがあれば、



当意即妙の句をつくるのである」

というのは、芭蕉以前の俳諧の心得とされていた。芭蕉もまたそうであつたらしい。『嵯峨誌』によると、この句碑は明治十一年に建てられた。

挨拶句とはいえ、ことばがなだらかで、景観の大きさが表現されている。しかも大悲閣への石段が二町（一町は約一〇九メートル）であることも、よくわかる。明治十一年の碑文にも「且ツ、此ノ閣ニ登ル道標ト為ス」とあつて、りっぱな句が実用を果たしているのである。俳句の効用のひとつといつていい。<sup>(注37)</sup>

司馬遼太郎は「花の山」の句を「芭蕉実作句」と考えて評している。「街道をゆく」ではたびたび芭蕉のことを取り上げているのだが、「芭蕉」の句とされるものに否定的な見方を示していることも多い。<sup>(注38)</sup>しかし「花の山」の句は「芭蕉」が詠んだと考えていたのだろう。この他にも正岡子規や芥川龍之介、出口對石や本山桂川といった人物が大悲閣を訪れている。<sup>(注39)</sup>「芭蕉」の俳句の分類上は「存疑句」とされる「花の山」の句だが、受け止め方は人それぞれである。しかし共通しているのは「花の山」の句を「芭蕉」が詠んだものと強く意識しているのである。

#### 四 現代に生きる大悲閣と芭蕉句碑

ここまで時代ごとに「花の山」の句と、大悲閣に建立された芭蕉句碑について見てきた。現在「花の山」の句や芭蕉句碑がどのように捉えられているのか、令和四年（二〇二二）七月三十日に現地を訪れ、千光寺十三世大林道忠住職にお話を伺った。まず嵐電嵐山駅の観光案内所で大悲閣の場所を尋ねた時に、芭蕉句碑のことも伺ったが、丁寧<sup>(注40)</sup>に教えていただいた。観光案内所だからこそ存じなのかもしれないが、芭蕉句碑のことが認識されているという証左であろう。大悲閣の入り口に立つ芭蕉句碑は、きれいに整備されている。他地域では明治時代に建立された碑であっても、朽ちてしまっているものもある。<sup>(注41)</sup>しかし「花の山」の句碑はそうではない。句碑が大切にされているということである。大林住職のお話によると、芭蕉は大悲閣を訪れ「花の山」の句を詠んでいると考えられるという。実際『嵯峨日記』の頃には、落柿舎に滞在し、保津川で舟遊びに興じている。<sup>(注42)</sup>また大悲閣の建立者である角倉了以は保津川を始め、さまざまな河川の整備に関わっている。一方で芭蕉も延宝五年（一六七七）、水戸藩邸の防火用水に神田川を分水する工事に携わった事が知られている。<sup>(注43)</sup>共通点のある人物が建てたお堂を見逃すような人物とも思い難い。だからこそ「花の山」の句は残されたのだろう。そして「花の山」の句は受け継がれ、現在においても芭蕉が詠んだ

と信じられているのである。現在では新聞や雑誌に大悲閣が取り上げられているが、必ずと言っていいほど「花の山」の句のことも取り上げられている。<sup>(注4)</sup>それは「花の山」の句の句碑が存在するからである。単なる口伝だけでなく、芭蕉句碑があることよって「花の山」の句の伝承は信憑性を増すのである。「花の山」の句が「芭蕉実作句」と証明されるには、新しい史料の発見を待つしかない。しかし「花の山」の句が大悲閣で生まれ、当該地域に定着し、芭蕉句碑を建立することで「花の山」の句にまつわる伝承が権威づけられているのは間違いない。

さらに句碑が建てられたことが大悲閣の再興につながったことを前述した。大悲閣の再興という目的を達成するためには、芭蕉句碑でなければならなかったのである。大悲閣を詠んだものには石川凹の漢詩や萩原広道の和歌も存在している。<sup>(注4)</sup>ただ大悲閣を詠んだ碑を建てるのであれば、石川詩碑でも萩原歌碑でもよかっただろう。しかし大悲閣を再興するためには多くの援助が必要である。多くの援助を得るためには、芭蕉が訪れ句を詠んだことを顕彰することが一番だったのである。

#### おわりに

本稿では「花の山」の句に焦点を当て、句や句碑がどのように捉えられてきたのかを考察してきた。今回論じてきたのは、あくまで一つの事例に過ぎない。全国には同じような「存疑句」と分類される句が多く伝わっている。他の地域ではどのように伝えられているのか。どのような役割を担っているのか。一つずつ明らかにしていく必要がある。また「存疑句」同士で比較することで見えてくることもあるかもしれない。「存疑句」を「芭蕉実作句」と証明することは現段階では難しい。しかし芭蕉が詠んだと伝え、信じられている「存疑句」の存在は明らかにできるはずである。

#### 【注】

注1 石田孝嘉著『続・京都史跡事典』二〇〇六 新人物往来社。

注2 (一)と同書。

注3 中村俊定校注『芭蕉俳句集』(一九七〇 岩波書店)、井本農一ら注解『松尾芭蕉集』一(一九九五 小学館)などに「存疑句」として掲載されている。

注4 頼原退蔵編『芭蕉俳句全集』一九四七 全国書房。

注5 竹内千代子著「芭蕉の存疑句―重厚蒐集の芭蕉発句をめぐる―」(関西大学国文学会編『国文学』七十一号 一九九四年六月 自刊)。

注6 (5)と同書。

- 注7 落柿舎重厚編『もとの水』一七八七自序 刊行年不明 早稲田大学図書館蔵。
- 注8 高木蒼梧著『俳諧人名辞典』一九六〇 明治書院。
- 注9 (8)と同書。
- 注10 虬戸庵素綾編『風羅袖日記』一七九九自序 刊行年不明 東京大学総合図書館蔵。
- 注11 古学庵仏兮ら編『俳諧一葉集』一八二七序 刊行年不明 早稲田大学図書館蔵。
- 注12 月院社何丸編『芭蕉翁句解参考』春 一八三〇自序 刊行年不明 早稲田大学図書館蔵。
- 注13 (12)と同書。
- 注14 山口敬太ら著「近世の紀行文にみる嵯峨野における風景の重層性に関する研究」(『土木学会論文集』D 六六卷一号 二〇一〇年一月 土木学会)。
- 注15 (14)と同書。
- 注16 駒敏郎ら編『史料 京都見聞記』第一巻〜第三巻 一九九一年 法蔵館。
- 注17 (16)と同書。正しくは天保九年(一八三八)に石瓦翁によってまとめられた『百たらずの日記』にもある。しかし「大悲閣を見のこし侍るとそ恨なりける」と書かれているのみで、大悲閣に行ったわけでもなく、大悲閣の描写もないので、今回は除外した。『百たらずの日記』は駒敏郎ら編『史料 京都見聞記』第二巻(一九九一年 法蔵館)所収。
- 注18 黒川道祐編『近畿歴史記』(駒敏郎ら編『史料 京都見聞記』第一巻 一九九一年 法蔵館)。
- 注19 (18)と同書。
- 注20 津村涼庵編『思出草』(駒敏郎ら編『史料 京都見聞記』第二巻 一九九一年 法蔵館)。
- 注21 西澤一鳳軒編『綺語文章』(駒敏郎ら編『史料 京都見聞記』第三巻 一九九一年 法蔵館)。
- 注22 秋里籬島編『都名所図会』巻之四「石白虎」一七八六 吉野家為八 早稲田大学図書館蔵。
- 注23 堀永休編『嵯峨誌』(一九三一 嵯峨自治會)を参考に、執筆者が訓点と句読点を施した。
- 注24 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第八巻 一九八七 吉川弘文館。
- 注25 (1)と同書。
- 注26 住川英明著「書画という対話」(鳥取大学附属図書館編『鳥取大学附属図書館報』第九十九号 二〇〇二年四月 自刊)。
- 注27 (26)と同書。
- 注28 小山泰山編『福祿寿』一八八九跋 刊行年不明 早稲田大学図書館蔵。
- 注29 豆田誠路著「文人山中信天翁の交友関係と書画文玩」(『碧南市藤井達吉現代美術館紀要』四 二〇一七 自刊)。
- 注30 石田有年画「洛西嵐山大悲閣眺望之圖」一八九一 京都府立総合資料館所蔵。
- 注31 中村俊定校注『芭蕉俳句集』(一九七〇 岩波書店)を参考にして選定し、実際に書籍を確かめて確認した。
- 注32 中村俊定校注『芭蕉俳句集』(一九七〇 岩波書店)を参考にして選定し、実際に書籍を確かめて確認した。
- 注33 荻原井泉水著『芭蕉巡礼 随筆芭蕉Ⅳ』一九五五 春秋社。
- 注34 (7)と同書。
- 注35 中村俊定校注『芭蕉俳句集』一九七〇 岩波書店。

- 注 36 山口誓子著『句碑をたずねて』一九六五 朝日新聞社。
- 注 37 司馬遼太郎著「嵯峨散步」(『司馬遼太郎全集』第五十九卷 一九九九 文藝春秋)。
- 注 38 司馬遼太郎著「近江散步」(『司馬遼太郎全集』第五十七卷 一九九九 文藝春秋)では、「正月も美濃と近江や閨月」という「存疑句」に対して、やや否定的な見解を示している。
- 注 39 正岡子規著『松蘿玉液』一九八四 岩波書店。葛巻義敏編『芥川龍之介未定稿集』一九六八 岩波書店。出口對石著『芭蕉塚』一九四三 長崎書店。本山桂川著『芭蕉名碑』一九六一 彌生書房。
- 注 40 群馬県沼田市戸神町にある虚空藏尊の境内には、「花之本桃青大神」と刻まれた碑が建っている。これは明治三十年(二八九七)に「ほのほの社」によって建立されたものである。実際に令和二年(二〇二〇)八月七日に現地を訪れたが、虚空藏尊の本堂は掃除されているものの、芭蕉の神号碑は劣化し判読が難しくなっていた。またすぐ脇に支柱がありおそらく説明版があったのだろうが、いまは何もなくなっていた。
- 注 41 井本農一ら注解『松尾芭蕉集』二 一九九七 小学館。
- 注 42 今栄蔵著『芭蕉年譜大成』一九九四 角川書店。
- 注 43 例えば「おまいり日和 大悲閣千光寺」『読売新聞』夕刊 二〇二二年四月十四日の記事においても、冒頭で芭蕉の句碑は紹介されている。
- 注 44 石川凹の漢詩とは「大井川」である。仁科白谷編『嵐山風雅集拔書』(一八三九 弘前市立図書館蔵)所収。  
また萩原広道の和歌とは次のものである。  
嵐山の花見にもものしける時大悲閣にて、ふけはちる(静岡県立美術館蔵短冊)